

# 技術が脅威となる時

## *Woman on the Edge of Time*とユートピア思想

小澤 正人

### I

Marge Piercyの*Woman on the Edge of Time* (1976) は、当時のアメリカ（と「先進諸国」）の科学技術中心的な文明のあり方を批判し、主人公Connieが招かれた2137年の未来世界をより望ましい世界として提示するユートピア小説である。この未来世界を彼女が最初に訪れた村の名からMattapoissettと呼ぶことにする (52)。そこは、一見すると科学技術を廃し、自然の中で牧歌的に生きる「エコロジカル」な社会に見えるが、実際には科学技術と人間の生とを調和させた社会として描かれている。

Connieと最初に接触した未来の女性Lucienteは、過去の人間と連絡を取るこの実験に関わっている自分たちが冗談で“the Manhattan Project”と呼ばれていると言う。“It’s a rib, you see, because that was a turning point when technology became itself a threat.” (56) 原子力の軍事利用を歴史上の転換点とみなして、*Woman on the Edge of Time*は科学技術の誤用・悪用と適切な利用との問題を考察していく。

ユートピア研究の観点から、現実社会の問題を指摘し、批判する作品を「診断」と考え、更に、その問題を放置したり、強めたりすると生じかねない悲惨な生活を描く作品（アンチ・ユートピア小説）を「警告」、また、問題を解決すれば可能となるようなより望ましい世界を描く作品（ユートピア小説）を「治療とその結果」と考えることができる。*Woman on the Edge of Time*では、(1) Connieのいるアメリカと彼女が収容されたRockover State Psychiatric Hospital、(2) 物語後半で彼女が迷い込んでしまう別の未来に存在するニュー・ヨーク、(3) Mattapoissettが、それぞれ現実世界、アンチ・ユートピア、ユートピアに対応している。（現実世界は、診断を必要とし、徴候ないし症状を示している点で

は、既に病んでいるものとされており、ユートピアとアンチ・ユートピアのどちらでもない中間点にあるというよりも、実際にはむしろ潜在的アンチ・ユートピアに近い。）

本論では、はじめに作中の現実世界を、構造上共通点の多いKen Keseyの*One Flew Over the Cuckoo's Nest*（1962）と比較し、ついで、二つの対立的未来とConnieの関係を、過去に干渉して歴史を変える時間旅行SFの系譜において考え、この作品とユートピア思想について考察する。

## II

Tom Moylanの*Demand the Impossible: Science Fiction and the Utopian Imagination*（1986）は、1960年代、70年代のアメリカのユートピア小説に関する代表的研究書であり、彼の“critical utopias”の概念はこれ以降の多くの研究書で取り上げられている。同書で彼は20世紀に入って古典的ユートピアを描く作品が衰退し、アンチ・ユートピア、ディストピア小説が増えたが、1960年代から再び新しい形のユートピア小説が登場したと述べている。（「アンチ・ユートピア」と「ディストピア」を区別して使う場合もあるが、本論では前者を双方を含む総称として用いる。）彼によれば、当時の社会的変動の影響を受けて、“This revived longing for the not yet realized potential of the human community was expressed in many ways in the emerging oppositional culture of the late 1960s and the 1970s.”（10）となり、ユートピア思想もSFや実験小説の影響を受けて、新しいものを生み出したという。彼は、Joanna Russの*The Female Man*（1975）、Ursula K. Le Guinの*The Dispossessed*（1974）、Marge Piercyの*Woman on the Edge of Time*、Samuel R. Delanyの*Triton*（1976）などをとりあげ、そうした作品群を“critical utopias”（2）と呼んだ。ここで“critical”は次の二つの意味（① “in the Enlightenment sense of *critique* – that is expressions of oppositional thought, unveiling debunking, of both the genre itself and the historical situation” ② “in the nuclear sense of the *critical mass* required to make the necessary explosive reaction”（10））で使われている。

A central concern in the critical utopia is the awareness of the limitations of the utopian tradition, so that these texts reject utopia as blueprint while preserving it as dream. Furthermore, the novels dwell on the conflict between the originary [sic] world and the utopian society opposed to it so that the process of social change is more directly articulated. Finally, the novels focus on the continuing presence of difference and imperfection within utopian society itself and thus render more recognizable and dynamic alternatives. (10-11)

ここで取り上げられた4人のうち3人が女性なのは必ずしもMoylanの恣意的選択ではない。先にあげた60年代の変動的状況にはフェミニズム運動の活発化が含まれ、feminist utopiaやfeminist science fictionが多く書かれるようになり、重要なものと考えられてきたことと呼応している。

Moylanは後に*Scraps of the Untainted Sky* (2000) で、1980年代にまたユートピアの退潮が起こると述べ、その後に増えてきたアンチ・ユートピア的作品群を“critical dystopias”と名付けている (iv, ch.6)。“in the years [1980-90] neither humanity nor the environment benefited from their [Ronald Reagan’s and George Bush’s] apparently utopian promises. Indeed, the situation became increasingly dystopian as the celebration of Utopia became a mark of triumph for Anti-Utopia.” (183) (PiercyのSF *He, She and It* (1991) も取り上げられている。この作品は、*Woman on the Edge of Time*中のアンチ・ユートピア社会と共通するらしい未来社会を舞台としている。)

しかし、ユートピアとアンチ・ユートピアとSFの関係、またそれら各々とフェミニズムとの関係を個別に見ていくことも重要ではあるが、その結果、SF論でfeminist Utopiaをジャンルの周辺ないし外部のものとみなしたり、feminist Utopia論でSF(特に男性作家による作品)があまり取り上げられない傾向もあるように思われる。“Marge Piercy’s first SF novel, *Dance the Eagle to Sleep*, comes at the beginning of a decade that sees more women writing SF, and feminist writers exploring SF as a didactic genre.” (Clute, 78 「1970年」の項) “[Piercy’s] strong

commitment to feminism led her to venture into sf with the exceptionally thoughtful visionary fantasy *Woman on the edge of Time*" (Stableford, 263)) Edward JamesはSF作品に対する各種の賞について述べながら、Margaret AtwoodやPiercyが“outsiders”（引用符は原文にも付いている）とされる点に触れている（146）。より広い視野で見れば、こうしたユートピア、アンチ・ユートピア、SFのありようは60年代以降の歴史状況の中で個人と社会の新しい関係の様相を架空社会の構築を通して模索する作品群としてとらえることができるし、SFについていえば、この時代に主流文学がSFやファンタジーの要素をより積極的に取り入れ、またSFが自己の手法に自覚的になり、「文学的完成度」を意識し始めたということとも関係している。

### Ⅲ

*Woman on the Edge of Time*の「現在」のパートでは、Connieの生きてきたアメリカ社会の問題点が示される。既に述べたように、Mattapoissettはこの病んだ社会が健康になった時の姿として示されているので、Connie（と読者）は現代の様々な問題点をその都度Lucienteたちから指摘されたり非難されたりして、現代のアメリカが“the Age of Greed and Waste”（55）にあることを認識する。そして、彼女が収容される精神病院は、実際の病院であると同時に、その社会の縮図であり象徴でもある。

Connieは、貧しいメキシコ系アメリカ人で、父や夫から暴力を受け、妹を助けようとしてかえって精神病院に入れられてしまう。“Herself with a police record and a psychiatric record, a fat Chicana aged thirty-seven without a man, without her own child, without the right clothes”（30）彼女は、race/gender/classそれぞれの点でmarginalな位置にいる。“Connie is oppressed because she is a woman, Mexican, poor, unemployed, a single parent, and branded by the medical establishment as psychotic”（Moylan, 1986 123）“In a society in which class, race, and gender are determinants of power, she is virtually powerless”（Bammer 95）

彼女の三つの名前は人生の分裂を暗示している。

Anyhow, in a way I've always had three names inside me. Consuelo, my given name. Consuelo's a Mexican woman, a servant of servants, silent as clay. The woman who suffers. Who bears and endures. Then I'm Connie, who managed to get two years of college – till Consuelo got pregnant. Connie got decent jobs from time to time and fought welfare for a little extra money for Angie. Then I'm Conchita, the low-down drunken mean part of me who gets by in jail in the bug-house, who loves no good men, who hurt my daughter. (122)

Bammerは前段落中の引用に続けて、彼女は自分の名前さえ選ぶことができず、作中を通してConnieと記されていることが、“her powerlessness is inscribed into the very narrative perspective” (95) と述べている。これに対してMatta-poissettでは住人はたった一つの名前をもつだけで、姓も持たない(76)。また、彼女が自分の母語ではない英語を使わなければならないことも抑圧となっている。(Bammer 103)

Connieが（読者から見ると）やむをえない混乱と暴力を示したために、理不尽にも精神病院に入れられてしまうという点から見ると、*Woman on the Edge of Time*が、女性を狂気と関連付け、隔離・監禁して、管理し、矯正しようとする物語の系譜に属しているのは明らかである。Feminist utopiaの代表作*Herland* (1915) を書いたCharlotte Gilmanの“The Yellow Wallpaper” (1892) も（転地療養ではあるが）この系譜に含まれるであろう。

病院は患者の生活よりも、Redding医師達の研究を重視している。彼らは人間の脳に電極“electrodes”を埋め込んで発作や衝動的暴力行為を抑え、行動をコントロールしようとしている。“We believe through this procedure we can control Alice's violent attacks and maintain her in a balanced mental state. (204) だが、Connieの患者仲間のSybilの言うように、これは“Control. To turn us into machines so we obey them.” (200) に他ならない。

この作品で、患者に対して行われる電気ショック療法electroshock therapy, electroconvulsive therapyやロボトミー手術lobotomyは実際に行われていた。

Sylvia Plathの自伝的要素の強い小説*The Bell Jar*（1963）では、主人公Estherが電気ショック療法を受けるし、ロボットミ手術を受けた患者も登場している。

SFやアンチ・ユートピア作品では、Zamyatinの*We*（1922）で主人公が最後に脳手術をされてしまうし、Michael Crichtonの*The Terminal Man*（1972）では電極を埋め込まれた患者の暴走がテーマになっている。外科的な処置によるものではないが、Anthony Burgessの*A Clockwork Orange*（1962）では、強制的な条件付けで主人公の暴力衝動を押さえ込もうとする。

Connieが「本当に」精神的な病気なのかどうかを判断するのは難しい。病院側の診断は作品の最後に“Excerpts from the Official History of Consuelo Camacho Romos”（377）として示され、Bellevue Hospitalの診断では“Schizophrenia, undiff. type 295.90.”（378）、Rockover State Psychiatric Hospitalの診断では“Paranoid Schizophrenia, type 295.3.”（379）となっている。だが、読者はConnieに感情移入しているので、彼女は家庭環境や生活のせいで自暴自棄になって暴力を振るったのであり、ほとんど正常な精神状態にあるのではないかと考えてしまう。“Connie is a sane woman labelled insane, a survivor reduced to a victim.”（Moylan, 1986 123）主人公が正常なのに捕らえられ、実際にはそれが間違っているはずの社会の基準に合わせて処理される物語は、プラトンの『国家』（B. C. 375）に出てくる洞窟の中で影を見ている人々とそこから出て太陽の光を見てきた人間の物語以来のものである。SFやファンタジーでは、「真理」や「真相」を知った人物が狂人扱いされる作品は多い。先に上げた、女性を狂気と結び付けて病院に押し込めようとする作品群もこの系譜に属していると考えられることもできよう。

#### IV

*Woman on the Edge of Time*をこうした幾つかの文脈において考えた時、Ken Keseyの*One Flew Over the Cuckoo's Nest*（1962）が特に興味深い比較対象となる。Bartkowskiは*Woman on the Edge of Time*を論じる章で、1960年代の“counter culture”とそこに潜んでいた“patriarchal positions”（64）について述べている。

Most writers of feminist utopian fictions have gathered some wisdom from the political activity in which seeds were sown for their own struggles. In Ken Kesey's *One Flew Over the Cuckoo's Nest* [ . . . ] we also find a critique of the "Combine," the mental institution's machinelike control of body and mind. Piercy's novel adds a feminist component missing from the earlier book. Where Kesey's text is blatantly woman-hating, Piercy condemns the men and women who run such institutions and their exploitive treatment of women and men of all cultures. (63)

Tannerは、1950-70年のアメリカ小説を論じた*City of Words*で、語り手Chiefの考える"Combine"は"another version of the notion that society is run by some secret force which controls and manipulates all its members, which is so common in contemporary American fiction." (373) と述べる。またOldermanは1960年代小説論*Beyond the Waste Land* (1972) で"The institution is a concrete image for those forces larger than us and beyond our knowledge that seem to have gained power over our lives." (33) と述べ、以前なら小説はこの"institution"で終わっていた("marriage if it was a happy novel, an insane asylum if it was touched by despair" (33)) が、1960年代ではそこから始まると論じた。

It is as if Holden Caulfield's quest [ . . . ], ending in an insane asylum, signaled the end of American quests for the pure Utopia. Now the novel of the sixties begins where Holden left off – at the end of adolescence and in the waste land asylum, hoping to move beyond. (33)

Leedsは*One Flew Over the Cuckoo's Nest* が示した問題をこうまとめる。

The questioning of a monolithic bureaucratic order, the rejection of stereotyped sexual roles, the simultaneous awareness that healthy sexuality and a clear sense of sexual identity are prerequisites for human emotional sur-

vival, the recognition and rejection of hypocrisy, the devotion to the expression of individual identity. (13-14)

（“healthy sexuality”や“a clear sense of sexual identity”については、先にあげた Bartkowskiの視点とあわせて後でもう一度触れる。）

主人公McMurphyは“freedom, independence, anarchic humor”を象徴しているが（Tanner 373）、最後にはロボットミ―手術を施され「敗北」する。

作品中の“Combine”は“a central agency for that society’s suppression of individuality”（Leeds 14）で、“Combine [ . . . ] is not just an organization; it is a mechanism, a machine that threshes and levels; its ends are Efficiency and Adjustment”（Olderman 37 斜体はOlderman）で、それを代表する存在として患者達の前に現れるのが“Big Nurse”である。“She is the servant, or rather the high priestess of [the Combine]”（Tanner 373）彼女は“Efficiency and Adjustment”（Olderman 37）を重視し、“subtle humiliations or punitive electric shock treatment”（Tanner 373）で患者を管理しようとする。“In a crude way she embodies the principles of Behaviorism, believing that people can and must be adjusted to the social norms.”（Tanner 373）“Combine”は“mechanistic”と“matriarchal”の二つのレベルで機能し（Leeds 20）、“Big Nurse”の名前“Ratched”は“ratchet”に通じ、彼女が女性と機械双方の性質を持つことを暗示している（Olderman 36, Leeds 20）。

ここで取り上げた三人の批評家に共通しているのは、病院に象徴される現代社会が、その規範を人間に押し付け、効率的、機械的な存在にしようとしており、しかもそれが“matriarchy”によってなされているという見方である。そこには、子供を食らう恐ろしいGreat Motherへの男性からの恐怖が現れているように思われる。（本節始めのBartkowskiの引用参照。）それ故（？）男性作家、男性主人公、男性批評家、男性読者にとって、この病院と“Big Nurse”は現代社会の持つ、男らしさへの脅威をあらわしている。患者が男ばかりなのもこの見方を強調する。Leedsはそれが男性の“identity”を奪うものであり、McMurphyの戦いとは患者の“manhood”を「人間らしさ」と「男らしさ」双方の点で回復させようとするものだと言う。ロボットミ―手術は“dehumanization”であるが、



当然のように“ultimate castration”と表現される (Leeds 42)。

Oldermanの著書*Beyond the Waste Land*はその題名からも明らかなようにT. S. Eliotの*The Waste Land* (1922)を踏まえ、1960年代のアメリカ小説を、“Questing Knight”による“Fisher King”の治癒と王国の再生という観点から論じている。作品の終わりで、語り手Bromden Chiefは、手術されて人間らしさを失ってしまったMcMurphyを殺し、その死を通して“Fisher King”としての回復と解放を手に入れる。Native AmericanであるChiefが彼を閉じ込めていた文明から自然へ回帰することは、文明=男性、自然=女性とする二分法からは一種の女性性の回復と読めないこともないが、それ以上に全体を通しての女性恐怖が目立つように思われる。

次に*Woman on the Edge of Time*での病院について考えてみる。既に述べたようにここでも電気ショック療法やロボットミ―手術を使って患者を管理、支配しようとしている。ロボットミ―手術を受けた患者Skipはおとなしくいうことを聞くようになり、きちんと溶接されなかったロボットのように動くようになる(270)。(だが、完全に人間性がなくなったわけではなく、“something of Skip”(270)が残っていて、最後に自殺してしまう。)医師達は患者の脳に電極や透析管“dialytrode”を埋め込んで人間をロボットのようにコントロールする研究を進めている。Redding医師はAliceに電極を埋め込む手術の際に“ We believe this kind of hard-core senseless aggression can be controlled – even cured.” (203)と述べ、さらに説明を続ける。

“You see, we can electrically trigger almost every mood and emotion – the fight-or-flight reaction, euphoria, calm, pleasure, pain, terror! We can monitor and induce reactions through the microminiaturized radio under the skull. We believe through this procedure we can control Alice’s violent attacks and maintain her in a balanced mental state.” (204)

やがてConnieも“dialytrode”を埋め込む手術をされてしまう。手術を受けながらConnieは考える。“these men believed feeling itself a disease, something to

be cut out like a rotten appendix. Cold, calculating, ambitious, believing themselves rational and superior, they chased the crouching female anima through the brain with a scalpel. (282) 彼女は自分が“a walking monster with a little computer inside” (283) にされてしまうだろうと思う。

Moylanは“the institutional violence of the mental ward – which [ . . . ] functions as a microcosm of the Bureaucratic/capitalist system, with its attendant racism, sexism, and violence” (123-124) と言い、彼女が戦っている相手を“the overwhelming power of the phallogocratic/capitalist/bureaucratic structure” (125) とする。

Ruppertは*Reader in a Strange Land* (1986) で、1960年代のユートピアを“opened”な“ambiguous utopias”と呼び、“reader-response criticism”の方法を用いて論じているが(xi)、PiercyやLe Guinのユートピアにおける“social criticism”と“imaginative utopian fantasy”という二面性を重視している(136)。“As a social criticism, *Woman on the Edge of Time* is a devastating indictment of an extremely oppressive society dominated by power relations, exploitation, manipulation, and victimization. (136) 手術についてはZamyatinの*We*同様に“to control [Connie’s]‘deviant’ behavior so that she will be able to ‘adjust’ to society.” (137) だという。

この作品でも病院を代表する人物Reddingの名は象徴的であるように思われる。“redding: the action of separating combatants or of arranging, tidying, clearing up, etc.” (Oxford English Dictionary) このもととなった動詞としてのreddには“to clear, to clean up: to disentangle, to put right; to put in order, make tidy, by clearing away whatever is in disorder or is unnecessary”などの意味がある。この語はLucienteの言葉の中では「知識」「理解」に近い意味でも使われており、ある程度意識的なものではないかと思われる。“‘Now I lack vocabulary.’ Luciente reached for [Connie’s] arm, but she dodged. ‘We must work to commune, because we have such different frames of redding.’” (42) “Luciente shook his head sadly, his expressive dark eyes liquid with sorrow. ‘I was redded for this, but I can’t find the door to what you’re meaning half the time.’” (56) (なお“red-

dening” 「赤くする」の冷戦期的意味を読むことも可能かもしれない。）

*One Flew Over the Cuckoo's Nest*でも問題となるのは病院からの規制、管理であり、Oldermanも“it's levelling sense of order” (39) と言い、“Kesey's point by this time is clear; the true madness, the real dry root of the waste land is not the patient's irrationality, but the deadly order, system, and rationality of the institution.” (39) と述べているのだが、“Big Nurse”を通して、どうしても“it is a 'Matriarchy,' and behind almost every ruined man is a grasping, castrating female whose big bosom belies her sterility but reveals a smothering momism.” (39) と言った見方が強調されがちである。一方、*Woman on the Edge of Time*では、Skipのように男性患者も描かれているのだが、男性医師対女性患者という対立を通して、男性中心の家父長制社会における女性の抑圧と言う図式に還元されやすい面がある。

*One Flew Over the Cuckoo's Nest*ではMcMurphyの死を通してChiefが生命力を取り戻し、病院から脱走する。それは希望を与える結末のように見えるのだが、この結末自体が、男性が文明社会と、子供を食い尽くすGreat Motherの双方から逃れ、優しく守ってくれる母なる自然のもとへ逃走するのだとも読めて、その場合には回復が必ずしも成長とはなっていないということもできよう。この作品の終わり方としてはそれでよいのだが、始めにあげたような、小説を診断と考える読み方からは、それでどうなるのか、どうしたらよいのかが見えてこないということになる。

Connieの患者仲間であるSybilは、Chiefにある程度対応した人物である。名前は“sibyl”と同じであり、「(バビロニア、エジプト、ギリシアなど古代の国々の) シビラ、巫女。女予言者。女の魔法使い、魔女 (sorceress)」(研究社『英和大辞典 第六版』より抜粋) を示し、本名かどうかは不明だが、彼女自身も意識的にその名を使っている。

“Hi, old darling! When shall we two meet again? In thunder, lightning, or in rain?”

“It looks like a good day to me, Sybil, seeing you again.” [said Connie.]

“We’re two witches, I mean. With a coven, think what we could do!” (83)

Tuttleはフェミニズムにおける魔女のイメージについて「現代の女性は、力強く、賢く、男性に怖れられる魔女のイメージを取り戻してきた。1968年に行われた『魔女宣言』(Witch Manifesto)は、魔女を最初のフェミニストとした。それ以来、多くのフェミニスト作家が反逆者、革命家、女神崇拝者という魔女のイメージを作ってきた」(410「witches 魔女」の項)と書いているが、ConnieとSybilにもそれを読み取ることができる。Connieはロボットミ手術をされることになり、医師たちの毒殺を企てる。彼女はSybilに、混乱にまぎれて脱走するように言う。Sybilは、魔女崇拝をしている女性達の所“a real covens” (365)へ行きたいと言う。Connieは最後に彼女を勇気付ける。“For me this is war. I got to fight it the only way I see. [ . . . ] I wish you a good life, Sybil. Hate them more than you hate yourself and you’ll stay free!” (366)

作品の最後にある病院の記録では“Amygdalotomy indicated but not carried out because of incident. . . .” (381) となっており、手術は行われなかったが、多分Connieは殺人の罪で裁かれるのであろう。それではこの現実の世界の物語に作中の二つの未来はどのように関係しているのだろうか。

## V

始めにLucienteがConnieのもとを訪れる。彼女が去った直後に来た姪のDollyが、椅子が暖かいとか話し声が聞こえたと言うところからは、肉体的にも存在していたように思われる。Lucienteは、自分が“sender”、Connieが“catcher”であり、後者が交信を受け止めることから連絡がつくのだと言う (42)。次いで、Lucienteに招かれて、ConnieがMattapoissettを訪れた時、食事をしたりして過ごしているのに、実は体はもとの時間にいるのだと告げられる。“As in dreams. You [Connie] experience *through* me. [ . . . ] Your body is where it was, unchanged in dress. Understand, you are not really here.” (78-79 斜体はPiercy) この後でも、Connieが未来に行っていた時、病院ではずっと意識を失っていると思われていたことが分かる (324)。

主人公が夢で、あるいは精神のみとか肉体を伴った形で未来へ行き、そこに素晴らしい世界を見出すという物語は、メルシエの『紀元二四四〇年』(1771)以来のユートピア小説の一パターンとなっている。

Stablefordは、精神が別世界を訪れる作品群を“visionary fantasy” (375) と呼んでいる。このヴィジョンを、主人公のまったくの夢、あるいは幻覚とする解釈も可能であり、夢・現実双方に読めるように書かれた作品もある。*Woman on the Edge of Time*についても、Connieが頭を打ったことがあるとか、アルコールやバルビツール依存症であったと病院記録にあることなど幻覚と読み取れなくもない書き方をしているが、本論では、時間旅行SFとして読み、精神だけが訪れたにしても未来社会は単なる夢としてConnieの頭の中だけにあるのではないという読み方をしていきたい。渡辺和子は、Connieが「憧れる理想郷を想像力で作り上げ、それに名付けをする」(188) と述べ、幻覚の可能性を強く意識した書き方をしている。なお、時間旅行SFと時間線の分岐については、小澤の「時間旅行者の孤独」を参照されたい。

主人公が未来を訪れるユートピア小説としては、Edward Bellmyの*Looking Backward, 2000-1887* (1888) とWilliam Morrisの*News from Nowhere* (1890) が代表的な作品であろう。(後者は夢なので、時間旅行しているとはいえないかもしれないが。) こうした作品の多くは、時間を一本の線として捉え、未来は現在の延長上にある。これに対して*Woman on the Edge of Time*では現在から生じる未来が二つ描かれ、現在に歴史の分岐点であるという重要性が与えられている。この点については後でもう一度取り上げることにして、まず作中でも大きく取り上げられている望ましい未来Mattapoissettについてその社会がどのようなものか、「現在のアメリカ」とどのように対比されているかを見ておく。

始めに述べたようにConnieはアメリカという“hierarchical society” (53) でgender/race/classなどの点で下位にいて抑圧されているが、Mattapoissettにはこうした点での差別がまったく無いとされている。

ここの住民は自然の中で全員が生き生きと暮らしている。私有財産はほとんど持たず (208)、政府や警察もなく (79)、軍隊はあるが男女全員が順番で兵役についている (100)。重要な問題は“planning council” (151) で合意に達するま

で十分に話し合っただけで決めている（154）。好きな仕事も嫌な仕事も分け合い（123）、全員で働いている（128）。

こうしたことを可能にしたのは、科学技術の効果的利用もあるが、大事なものは、生きること、働くこととは何かと言う意識の変化である。やりたくないことはしない、人に命令しない、金を数えない、やりたくない仕事をさせないという風になった時にかえって働く人が増えたという（129）。Levitasはこう述べている。

In the eutopia[sic] Connie witnesses and experiences different close interpersonal relations: sexual love, friendships, and parenting are transformed and operated by a dynamic that is not driven by possession. Mattapoissett is as far from the poverty, neurosis, and alienation of Connie's present as is imaginable. Vital factors in this utopia are, I believe, transformed property relations and non-hierarchical, non-binary, non-possessive relations of self to other. (Levitas & Sargisson 21)

彼らは基本的には自然の中で暮らしている。このような生き方を“primitive”と呼ばれる社会から学んだと言う（125）。“We tried to learn from cultures that dealt well with handling conflict, promoting cooperation, coming of age, growing a sense of community, getting sick, ageing, going mad, dying –”（125）

Connieはもっと「科学の進んだ未来社会」を予想していたので驚くのだが、“But Connie, some problems you solve only if you stop being human, become metal, plastic, robot computer. Is dying itself a *problem*?”（125 斜体はPiercy）と反論される。この意識の変革がこの社会の中心にある。

Mattapoissettの特徴であり、この作品を論じる時必ず取り上げられるのが、この世界でのsexとreproductionの完全な分離である。これによって性差の問題がほとんど解決され、男女の平等が達成されている。それを可能にしたのは、女性の妊娠・出産からの完全な解放と、育児に男女が平等に参加していることである。この世界では、子供は“brooder”と呼ばれる装置から生まれる。“the

brooder, where our genetic material is stored, where the embryos grow.” (101) Connieは“Mother the machine” (102) と考える。(ほとんどの批評家がここで Shulamith Firestoneに言及している。なお、feminist utopiasと「生殖テクノロジー」については小谷の「フェミニスト・ユートピア」や、Barの『男達の知らない女』第7章が詳しい。) 更に、ホルモンを使って、男性も授乳することが可能になり (134)、遺伝的なつながり“genetic bond” (104) なしに、男女ともに母として育児をしている。一人の子供が“comothers” “coms” (74) と呼ばれる三人の(男女の)母親によって育てられる。Lucienteはこう説明する。

“It was part of women’s long revolution. When we were breaking all the old hierarchies. Finally there was that one thing we had to give up too, the only power we ever had, in return for no more power for anyone. The original production: the power to give birth. Cause as long as we were biologically enchained, we’d never be equal. And males never would be humanized to be loving and tender. So we all became mothers. Every child had three. To break the nuclear bonding.” (105)

この社会は、“separatism” (例えばGilmanの*Herland*) によらないで、また“androgyny” (例えばLu Guinの*The Left Hand of Darkness*やTheodore Sturgeonの*Venus Plus X* (1960)) や「無性化」にもよらないで、構成員の平等を達成し、男性性のもつ否定的面を除去しようとしている。

「現代アメリカ社会」の性役割意識や家父長制的な思考を刷り込まれている Connieにとっては、女であること、母であることは自らのアイデンティティを確認する重要な問題であるために、最初にこれを知った時はMattapoissettのあり方に嫌悪と怒りを感じないではいられない。

[Connie] felt angry. Yes, how dare any man share that pleasure. These women thought they had won, but they had abandoned to men the last refuge of women. What was special about being woman here? They had given

it all up, they had let men steal from them the last remnants of ancient power, those sealed in blood and in milk. (134)

女性であることが意味を持たなくなった世界を肯定的にとらえることが始めはなかなかできないのだが、やがてそれを認めるようになる。（ユートピア論の見方から言えば、それに合わせて読者も同様の意識の変革を行うことが期待されている。）

（Mattapoisettの世界には、Luciente達と対立する勢力が南極や月に存在し、彼らと戦っている。つまりこの世界は、完成された全世界的ユートピアではなく、対立と戦争があるということで、それはLuciente達の意識や行動にも少なからぬ影響力を持っている。作品全体の構造からいうと後で述べるもう一つの未来の存在と重複する面があって中途半端な位置づけをされているようにも見えるが、この対立については後で触れる。）

“brooder”という完全な人工子宮の存在で分かるように、Mattapoisettは実際にはConnieのいる世界よりも科学技術が進んでいる。“shapers”というグループは遺伝子の改良を提案しているし（225）、優秀な人物が死ぬとその遺伝子を再生して子供を作ることがある（323）。全員が“kenner”という一種の小型コンピュータ“knowledge computer”（64）を身に付け、“holies”というテレビと通信装置をかねたらしい装置のネットワークがあり、優秀な飛行機械も武器も存在している。自動化された工場もたくさんある。

既に述べたように、問題となるのはそうした科学技術の使い方なのだ。単純な例を挙げれば、完全に自動で枕を作る工場についてJackrabbitは“Who wants to stuff pillows?”（129）と説明する。別の所でLucienteは、料理は“inventive”だからやりたい人間がするが、皿洗いは誰もやりたくないから機械にさせるともいう（173）。

何のためにどんな技術を使うか。だからこそ、先にあげたLucienteの言葉“some problems you *solve* only if you stop being human . . . . Is dying itself a *problem*?”（125）が出てくるのだし、彼らは常にそれを考えながら生きている。

大きな問題については徹底的に議論する。“final authority”は存在しない。



“We argue till we close to agree. We just continue.” (153) “How can people control their lives without spending a lot of time in meeting?” (154) ここにはユートピア的な人間の可能性への信頼が現れている。啓蒙思想的な人間理性への信頼といってもいい。Lucienteは“shining, brilliant, full of light”(36)を意味する。

(補足しておく、言語も当然ある意味では技術であり、Connieは英語に支配されているし、逆にMattapoissettでのLuciente達の“non-sexist language”(Moylan 1986 135)では、男女を区別する必要がほとんどないので三人称単数で男女を区別する主格代名詞he、sheが使われず、目的格、所有格では“per”が使われている。)

Lefanuは出産からの解放について、テクノロジーとの共存はPiercyの作品の大きなテーマだと述べている(59-60)。それは、よい技術・悪い技術があるというよりもよい使い方・悪い使い方があるという考え方に近いともいえよう。現代アメリカでは間違った使い方がされているというのはLuciente達の批判からも読み取れるし、彼らがその問題に意識的なのは、既に述べた例や、第1節で触れたように、技術が脅威に転化されたことの象徴として“the Manhattan Project”を取り上げていることから明らかである。更に、彼らはそのアメリカから自分達の世界が作り上げられてくるのかどうかを疑問に思っている。LucienteはConnieにこう言う。

“Those of your time who fought hard for change, often they had myths that a revolution was inevitable. But nothing is! All things interlock. We are only one possible future. Do you grasp?” (...)

“But you exist.” She tried to laugh. “So it all worked out.”

“Maybe. Yours is a crux-time. Alternate universes coexist. Probabilities clash and possibilities wink out forever.” (177)

Mattapoissettはありうるかもしれない可能な未来の一つに過ぎない。別の未来になるかもしれない。Connieが手術されることが決まった時、Lucienteに助けを求めると、彼女は支配するための技術と、それに抵抗してMattapoissett的未来へ進もうとするもの達との競争について語る。

“It’s that race between technology, in the service of those who control, and insurgency - those who want to change the society in our direction. In your time the physical sciences had delivered the weapons technology. But the crux, we think, is in the biological sciences.” (223)

Tuttleは『新版フェミニズム事典』の“reproductive freedom”の項で、1980年代の生殖に関する技術の急速な発展について述べて、こう続ける。

シュラミス・ファイアストーンやマージ・ピアシーなどの作家は、テクノロジーを通じて女性が生物学的な奴隷の状態から解放され、両性が子供を生き育てることを平等に分かち合う新しい世界を描いた。しかし現実の世界では、このようなテクノロジーの進歩が、フェミニストが理想とするもののために活用されるという兆しは今のところない。クローニングや人工子宮や胎児の性別を判定する羊水穿刺のようなテクノロジーの行き着くところは、女性のためになるどころか、女性はただ男性の快樂のためにとっておかれる少数者にされてしまう世界であろう。(322)

始めに述べたように*Woman on the Edge of Time*はこのテクノロジーの二通りの使い方を具体的に描き出そうとしている。物語後半でConnieは別の未来“some other place in the future” (288) に入り込んでしまう。この未来のアメリカは、上の引用の後半にあたり、Connieのいるアメリカが間違っただま進んでしまった時に生まれるかもしれないアンチ・ユートピアである。人間をサイボーグにしたり、マインドコントロールを行う技術を使って、“multi”と呼ばれる企業体“overlapping jurisdictions” (300) が全てを支配している。金持ちだけが遺伝子治療によって長生きをし、女性は性的な商品と化している。ここでは、Connieの受けた手術が管理と支配の方法として実用化され、Mattapoissettで女性解放のために使われた生殖テクノロジーが女性を道具にするために使われている。

第1節で挙げた「診断」「警告」「治療」という見方からすると、*One Flew*

*over the Cuckoo's Nest*は診断であり、(既に徴候や症状が出ていれば放置しておかない方がいいのは確かだが) それについてどう考えるべきかまでは明確には述べられていない。これに対して、アンチ・ユートピア小説は悪化した場合ははっきり警告するし、ユートピア小説は治療法を示し、その結果のより望ましい状態を具体的に示そうとする。(ただし、先回りをして言えば、この三つが全部揃っていれば良い作品であると言うわけではないのは当然である。)

二つの世界は、Connieのいるアメリカから分岐している。しかも、単に彼女の時代から生じているだけでなく、どちらになるかは彼女自身のあり方と大きく関わっているらしい。脳の手術を受けて“Her head felt wrong as [the doctors] put it in. Everything felt wrong.” (283) となり、更にSkipの悲惨な自殺のことを聞いた。そして次の章で彼女は突然別の未来で目覚めたのだった。つまり、この未来は、彼女の手術の成功と直接につながっているかもしれないのである。ようやくもとの時代に戻った彼女は“So that was the other world that might come to be. That was Luciente’s war, and she was enlisted in it.” (301) と考える。だが、戻ってきてからも依然調子は悪い。その後LucienteからJack-rabbitの死を知らされ、彼女に連れられて通夜に出る。戻ってみると12時間も意識を失っていたのだと告げられる。思うように未来と連絡がつかなくなる。

1週間後、彼女は必死の思いで未来に行こうとする。到着した未来ではLucienteたちが敵と戦っている。Mattapoisettの未来でも敵が力を盛り返してきている。もう一つの未来と共通するものがここでも強大化しているのである。Connieはともに戦うのだが、敵ともとの時代のRedding医師達とが混ざり合ってくる。実際には、もとの時代で意識を失っている彼女を回復させようとする「治療」が彼女の精神に影響を与えていたのかもしれない。

彼女は“dialytrode”をはずされる。短期間、親戚の家に滞在し、ひそかに毒物を手に入れて彼女は病院に戻る。彼女は未来での戦いに自分もここで参加しているのだと考えている。毒物は彼女の武器である。彼女の戦う意志が影響したのか、Mattapoisettに行って、Lucienteに前回の戦闘のことを告げるとそんなことはなかったと言う返事が戻る。“Not in my life, Connie. Not in this continuum. . . . With that device in your brain, maybe you visioned it. You’ve been red-

ded for visioning over the last months, grasp, from all this going over.” (367)  
先に述べたように、こうした点から彼女の未来での経験を全て幻覚だったと読むことも可能ではあろうが、ここではSFとして、主人公の行動が二つの未来の存在可能性を左右しているのだと考えたい。

再手術を前にして、彼女は医師達の毒殺を決意する。殺すことは悪いことだが、これは戦争なのだと自分に言い聞かせる (375)。もう Luciente と連絡はつかない。“[Connie] could no longer catch. She had annealed her mind and she was not a receptive woman.” (375)

先に述べたように、この後彼女は捕らえられ、殺人で裁かれるのであろう。果たしてそれは勝利なのか。彼女個人の物語として、戦って破れる（あるいは敗れても勝利している）物語は完結する。Redding 医師の研究は頓挫し、Sybil は多分うまく脱走する。物語の流れからは、彼女の決心と行動は Mattapoissett の存在を確かなものにしたはずなのであろう。しかし、Connie は敗れ、たとえ Redding 医師個人は死んだとしても、社会全体は依然同じ方向に進んでいくのではないだろうかと言う悲観的な読み方も可能であり、作品自体はこの点を明確にしないままである。

## VI

ユートピア小説は、読者に方向を示し、そこに向かおうとさせるのだが、20世紀に入ってから、啓蒙思想批判が起こり、2度の世界大戦を経て文明や科学への単純な信頼がもてなくなり、以前のような一面的で、押し付けがましいユートピアは好まれなくなった。始めに挙げた“critical utopias”や“ambiguous utopias”はこうした中から生まれた。例えば、*Woman on the Edge of Time*では科学技術との共存が可能にするユートピアだけではなく、同じその技術がもたらしうるアンチ・ユートピアも描かれ、読者に科学技術に関する再考を迫る。Ruppert は Le Guin の *The Dispossessed* (1974) から“ambiguous utopias”という言葉をとっているが、この作品でも、二つの世界がいわば相補的に描かれ、より望ましいと考えられる世界についても問題点が指摘されている。

それでも、(フェミニストであるなしに関わらず) ユートピアを論じる際に

は、必ずといっていいほど言われるのが、ユートピア作品は読者を変えようとするということである。ユートピアは“dialog between the world as we knew it and the better world that is not yet”であり、その対比を通して読者を“activate”する (Moylan 1986 37)。ユートピアを読むことは“activating experience”であり、作品が現実社会を“defamiliarize”して問題点を明らかにし、それを通して読者を変え (Ruppert xi)、“open-ended”なことで読者の“active”な関与を引き出すと言う (Ruppert 123)。それは欲望を教育し、“willed transformation”を引き起こそうとする (Levitas 124)。Bammerも同じように、ユートピアを実現するには希望するだけではだめだ、それは自動的に生じるのではなく、意思的に選択する“active intervention”を必要とするものだという (97, 137)。

そもそもフェミニズム自体が世界を変えようとする動きである。Bammerは1970年台のフェミニズムとユートピアを“partial vision”として論じており、それはMoylanやRuppertの考えとも通じる面を持つのだが、自分の議論の“basic points”を二つ挙げている。

(1) the fact that feminism in its most radical (or, as [Vivian] Gornick would have it, “revolutionary”) core is fundamentally utopian (feminism as “visionary politics,” in Gornick’s words); (2) the fact that this utopianism is partial in both senses of the word: partisan and limited.

こうした点から見れば、読者はConnieの選択を支持し、Mattapoissettのような世界の実現に参加していくことが求められていると言えよう。Connieは世界を相手に一人むなしく戦ったわけではなく、Sybilとともに読者をも「病院」から解放するのである。

## 参考文献

- Attebery, Brian. *Decoding Gender in Science Fiction*. New York and London: Routledge, 2002.
- Baccoline, Raffaella, and Tom Moylan. *Dark Horizons: Science Fiction and the Dystopian Imagination*. New York & London: Routledge, 2003.

- , and Tom Moylan. 'Introduction: Dystopia and Histories.' Eds. Baccoline, Raffaella, and Tom Moylan.
- Bammer, Angelika. *Partial Visions: Feminism and Utopianism in the 1970s*. New York and London: Routledge, 1991.
- Bar, Marleen S. 『男達の知らない女：フェミニストのためのサイエンス・フィクション』. 小谷真理・鈴木淑美・榎木玲子訳. 東京：勁草書房. 1999. (*Lost in Space: Probing Feminist Science Fiction and Beyond*. 1993.)
- Bartkowski, Frances. *Feminist Utopia*. Lincoln and London: U. of Nebraska P., 1989.
- Clute, John. *Science Fiction: The Illustrated Encyclopedia*. London: Dorling Kindersley, 1995.
- Kesey, Ken. *One Flew over the Cuckoo's Nest*. (1962) Harmondsworth: Penguin, 1976.
- 小谷真理. 「フェミニスト・ユートピア」. 坂上、巽、宮坂、坂本 編著.
- Leeds, Barry H. *Ken Kesey*. New York: Frederick Ungar Publishing, 1981.
- Lefanu, Sara. *In the Chinks of the World Machine: Feminism and Science Fiction*. London: Women's Press, 1988.
- Levitas, Ruth. *The Concept of Utopia*. Hemel Hempstead: Syracuse U. P., 1990.
- and Lucy Sargisson. "Utopia in Dark Times: Optimism/Pessimism and Utopia/Dystopia." Eds. Baccoline, Raffaella, and Tom Moylan.
- Moylan, Tom. *Demand the Impossible*. New York: Methuen, 1986.
- . *Scraps of the Untainted Sky: Science Fiction, Utopia, Dystopia*. Colorado: Westview Press, 2000.
- Olderman, Raymond M. *Beyond the Waste Land: A Study of the American Novel in the Nineteen-sixties*. New Haven and London: Yale U. P., 1973.
- 小澤正人. 「時間旅行者の孤独: *The Time Machine* から *The Time Ships* へ」 (1), (2). *Mulberry* 51号, 2002、52号, 2003.
- Piercy, Marge. *Woman on the Edge of Time* (1976) . London: The Women's Press, 1979.
- . *He, She and It* (1991). New York: Fawcett Books, 1992.
- Ruppert, Peter. *Reader in a Strange Land: The Activity of Reading Literary Utopias*. Athens and London: The U. of Georgia P., 1986.
- 坂上貫之、巽孝之、宮坂敬造、坂本光 編著. 『ユートピアの期限』. 東京：慶應大学出版局, 2002.
- Stableford, Brian. *Historical Dictionary of Science Fiction Literature*. Lanham, Maryland: The Scarecrow Press, 2004.
- Tanner, Tony. *City of Words: American Fiction 1950-1970* (1971). London: Jonathan Cape, 1976.
- Tuttle, Lisa. 『新版フェミニズム事典』. 渡辺和子監訳. 東京：明石書房, 1988. (*Encyclopedia of Feminism*. 1986)
- 渡辺和子. 『フェミニズム小説論：女性作家の自分探し』. 東京：柘植書房, 1993.